
水島司・田巻松雄 [編] 『日本・アジア・グローバリゼーション (21世紀への挑戦3)』(東京:日本経済評論社、2011年、272頁、2,500円+税、ISBN: 978-4-8188-2121-7)

(評) 山本 達也*

本書は、序章を含めて全八章からなる論文集である。「日本を含むアジアにおけるグローバリゼーションの展開が、二一世紀の世界をどのように変えていくかという問題意識」(1頁)を共通項とし、アジアがグローバリゼーションの影響をどう受け止め、対応し、逆に世界を席卷するグローバリゼーションにどう影響を及ぼすのかを問うものである。以下、序章を中心に本書の内容を概観し、書評子の所感を記したい。

序章において、水島司氏はアジアの近代を西洋諸国における植民地状況下に置かれた時代であると位置づけ、アジアの近代の終わりの局面を国家建設と国民統合が進められた時期とする。そして、国民国家システムの確立が近代の終わりを徴づけ、その後グローバリゼーションが訪れる、という視点を明示する。氏は国民国家システムの特徴を領域性であるとし、対照的にグローバリゼーションは境界の消滅に付随する流動化を特徴とし、また国民国家システムとグローバリゼーションがぶつかり合いつつも連動していく所以を提示する。そして、流動化に加え、生活や世界観の標準化、それに反する個性化、流動化における再編による格差等の構造化を挙げ、人びとの生活にそれらが大きな影響を与えていることを指摘する。

氏によれば、「労働や各種サービスを含めたさまざまな人と人との対面的・直接的関係を解体し、商品交換関係に最終的に移行させた」(13頁)ことこそが、グローバリゼーションによってアジアの近代にもたらされたものである。水島氏はインドを事例として取りあげ、近年のグローバリゼーションの進行が「前近代的な諸関係の残滓を最終的に消滅させる役割を果たした」(15頁)ことを喝破する。しかし、同時に「グローバリゼーションの動きのなかで、アジアが常に受け身だったわけではなかった」のであり「アジアがグローバリゼーションのただ中から新たに創造した知、いわばアジアの知とはどのようなものなのかについて、充分注意を向けなければならない。それらを幾つかの空間とその空間で生存を図る個人の両方に焦点を当てながら具体的に掘り出し、長期の動向のなかに地域ごとの変化の実態を位置づけることも、アジアを対象とした研究においてきわめて重要な課題であり続けよう」(15頁)と、氏は論じている。

昨今のグローバリゼーション研究を概観すれば、「環流」現象への着目等からも見えるように、一

* 日本学術振興会特別研究員(京都大学)

・ 2008、「グラムサラで構築される『チベット文化』」『文化人類学』、第73巻第1号、49-66頁。
・ 2011、「音楽をつくる—現代的チベット音楽の制作現場」田中雅一、船山徹(編)『コンタクト・ゾーンの人文学1 問題系』、晃洋書房、156-183頁。

方向的な「西洋化」とは異なった視点からグローバリゼーションを論じる研究が主流となってきた。本書の序章での指摘はこれら研究潮流と歩みを共にするものであり、アジア経済が世界経済のなかでどのような位置を占めていくのかを本書は明示していくこととなる。以下では、各章を概観し、簡単なコメントを付与することとする。

加藤弘之氏が担当する第一章は、中国の経済的躍進をめぐる議論が展開する。改革開放以後、「復権」した中国が先進国と発展途上国という二項対立を塗りかえる潜在性を秘めているとともにその経済力の不確実性によってグローバル経済に及ぼす影響力がいかなるものであるのかが提示される。加藤氏の論述は序章で提示された「アジアから世界への影響」という問題意識を踏襲したものであり、グローバル経済がアジアに及ぼす影響のみならず、アジアからのグローバル経済全体へのアウトプットがいかなるものになりうるのかを分析したものであると言える。

第二章では、90年代の経済自由化以降、インドが投資とサービス部門の発展によりグローバル経済のなかに組みこまれることで高度な経済力をつけ、世界規模の影響力を及ぼしているさまが佐藤隆広氏により分析される。それと共に、インドが東アジア経済やグローバル経済の地勢図を形成するにおいてどのような効用や悪影響をもたらすのかが提示される。本章も前章同様、序章での議論に沿ってローカルとグローバルの反照規定的な関係性が明示されているが、特にグローバルとアジア、インドという三つの軸を立てて、グローバル経済におけるインドの立ち位置によって、アジア各国の損益にも影響を与えることが指摘されている点は重要だと思われる。

第三章では、台湾、韓国、中国という三か国の開発に関して論じられる。朴一氏はこれまで議論されてきた開発経済学的な理解では上記三か国の様相が理解できないとし、あらたな視点で開発経済学はグローバリゼーション下のアジア経済を論じなおす必要があると語る。しかし、本章の議論はどちらかといえば分析者側の現状認識に対する提言であり、その点で、「アジアが21世紀の世界をどのように変えていくのか」という序章が提示した視点からは少々ずれてしまっているように思われる。

第四章は、グローバル経済下における地域主義の意義が論じられる。清水奈名子氏は、これまでの東南アジアにおける地域主義が国家補完的なものであり、ときにその利点が生かされていなかったことを指摘し、現在市民レベルで生じている東アジア共同体のもつ可能性を評価する。国家を超えたレベルでの交流の増加や連帯の形成が「流動性」というグローバリゼーションのもたらした現象の一つの帰結であるとすれば、本章の論述は、その可能性を問うための格好の事例ということとなるだろう。

日本における下層問題を外国人労働者と野宿者の問題という視点から論じたのが、田丸松雄氏が執筆する第五章である。日本に見られる下層問題は「資本や国益の観点に基づく有用性によって人間を選別・排除するメカニズムが、より洗練された形で強化され、われわれ自身の足元にも向けられていることを示す鏡」(198頁)であり、何らかの共同性の復権の重要性が論じられる。第四章が

示したものが、グローバリゼーションがもたらす流動性が垣間見せる可能性であるとすれば、本章の議論はグローバリゼーションによる構造化に特に焦点を当て、それがつきつける暗部を示したものであると言える。

第六章はアジアから世界に飛び出す専門職移民を扱うものである。石井由香氏は高度な技能をもつ移民を専門職移民と名づけ、中間層である専門職移民の動機付けやその出身国への循環について論じている。本章が描くのは、グローバリゼーションや国家を稼働させ、かつ支えるアクターのふるまいである。人びとに焦点を当てることで流動性の様相を提示する本章の議論は、書評子の研究するチベット難民社会においても一部当てはまるところがあり、構造化、世界的な標準化、そこからみ出る個体化という諸相をも同時に示していると言えるかもしれない。

第七章では、タイの都市部から農村部におけるジャパナイゼーションの進行が鈴木規之氏により示される。本章では、西洋化とイコール関係で論じられる傾向のあったグローバリゼーションの多層性が提示されていると言える。本章では東南アジアにおける日本資本の構造化に関する興味深い事例が数多く提示されているが、その紹介に終始した感もあり、分析がもう少し深められていればより興味深い論考となったであろう。

以上、本書の内容を雑駁にまとめてきた。書評子は経済学を専門としない門外漢であり、個々の論文を的確に批評する力量をもたないため、ここでは特に序章の記述を参照しつつ、全体に関する簡単なコメントをしたい。

序章における水島氏のグローバリゼーション理解は書評子のような文化人類学徒にとっても共感できるものである。特に、グローバリゼーションにおけるアジアの位置を受け身一辺倒なものにせず、能動的に働きかける点をも強調する水島氏の指摘はきわめて重要である。しかし、この指摘を踏襲しているのはごく数章だけであり、一部の論者は受動的な側面のみ論じているように見える。

また、「グローバリゼーションの真ただ中でアジアが新しく創出したアジアの知」を模索する本書が論じる「アジア」とは中国、インド、韓国、台湾、ASEAN 諸国、日本、タイである。だが、二十一世紀に挑戦する「アジアの知」というときに、誰が「アジア」の一員としてア priori に措定されているのか。本書ではその点が明確にされておらず、また論者間でも認識の差があるように思われる。

さらに、本書の論述における知の主体は、きわめて抽象的である。例えば、第五章において田丸氏は下層問題を取りあげ、グローバリゼーションがもたらす問題群を列挙し、下層問題とは皆に課せられた共通の課題であると論じる。しかし、下層問題に対して取り組み、グローバル化がもたらす解体作用に抵抗する主体とは誰なのか。課題を解決する「皆」のなかに下層民は含まれるのか。この点において、序章が論じるころの「アジアの知」「アジアからの働きかけ」を本書は納得する形で提示していないと言える。

本書を読んで痛感するのは、書評子が経済学的な書籍を真っ向から評する能力をもちあわせてい

ないことと共に、複雑極まるグローバリゼーションを論じるには、特定の学問的アプローチに閉じこもってでは十分な議論ができない、ということである。このことが示すのは、これまで言われてきた以上に、グローバル化が進む世界の分析や理解には学際的なアプローチや議論が望まれる、ということだろう。例えば上述のグローバリゼーションにおける主体の問題などは学際的な議論を展開し、グローバリゼーション研究をより深化させていくうえで格好の第一歩となりうるだろう、と書評子には感じられた。本書が切り開くのはそうした学際的な議論のアリーナであり、本書が提示する数々の事例や分析は、分野を異にする研究者がさらに広い研究の視座を得るうえで有益なものとなるだろう。